『比較民俗研究』27. 2012／6

書　評

岸上伸啓編著『捕鯨の文化人類学』

藤川　美代子※

1．はじめに

アメリカのドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』(2009) を見た。残酷なやり方でイルカを捕獲する、残酷な人々が暮らす町として描かれる太地町。このなかで太地町の人たちの顔にはモザイクがかけられ、まるでそこではイルカの密漁が日常的に行われているかのような光景が映し出される。一方、イルカの可愛さ、知能の高さを語り、そんなイルカを殺すなど、なんと非人道的なのだと主張する活動家やカメラマンたちは、堂々とカメラの前に現われる。嫌がる人々の生活を隠し撮りし続けたというのに、だ。これまでの生活のなかでイルカ漁を続けてきた人々に対して、動物愛護の立場に立つアメリカの活動家は、姿が可愛く、人と親密な関係を築くことのできるイルカを捕獲する人々は野蛮かつ残酷であり、それに反対することこそが文明的かつ人道的であるという。これと似た対立の構図を、私たちはこれまでに幾度となく見せつけられてきた。

より身近な例としては、犬食文化をめぐる議論が挙げられるだろう。フェルトカンプ・エルメルによれば、現在の韓国では、犬食をめぐって主に二つの論争が見られるという。一つは動物保護・愛護団体のもので、彼らは動物全般と「人道的な」関わり方をする必要性を主張し、犬食に反対する。もう一つは、運動家や政治家のもので、彼らは犬料理を韓国の文化的アイデンティティにつながるものとみなし、それを守らねばならないと主張して犬食に賛成する。犬食反対派の多くは、ペットに代表される「かわいい」「親しい」動物というイメージと、それを殺して食べようとする「野蛮人」を対照させる論法を利用し、議論を展開させる。そうした言説を間接的に支えるのが、近年のペットブームである。こうした犬食論争に現われる反対派と賛成派の主張は、「犬を食べる／食べない」という二者択一的な単純化された設問を掲げることで、より複雑なはずの現実を、自分の都合に合わせて二分化することにつながっている。さらに、そこには「在来文化（伝統文化）／外来文化（輸入された文化）」という対立図式だけでなく、そこに価値が序列化された「野蛮／文明」という図式が絡み合い、よりいっそう対立が深まることになる。こうして、従来の民俗社会では実に多様であった人と犬との付き合い方や犬に対するイメージは、排他性の強い二つの立場に収斂され、そこから容易に葛藤が生じることにつながっているという［エルメル 2006］。

冒頭に挙げた『ザ・コーヴ』の出演者や、記憶に新しいシー・シェパードといった動物愛護団体や環境団体と、イルカを含む鯨類を捕殺して食べる人々の間には、犬食文化をめぐる立場と同じように、「野蛮／文明」という単純な二元的議論に集約されながら根強い対立があり、両者の間には越えられぬ深い溝が横たわっているかにみえる。岸上伸啓編著の『捕鯨の文化人類学』は、そんな現代の捕鯨が抱える問題に向き合い、世界各地の捕鯨や捕鯨文化の歴史と現状を広い視点で比較・検討することを可能にした学際的な研究成果である。歴史的には、世界の各地で人間がクジラを資源として利用してきたことは明白にもかかわらず、欧米諸国は自然保護の観点からクジラを捕り、食すことを批判する。それは本当に悪いことなのか、捕鯨支持派と反捕鯨派はこのまま分かり合えぬまま平行線を辿るのか。この時代に、自分たち研究者は何ができるのだろうかと、執筆者たちは問いかける。各論文の執筆者は、19名に上る。文化人類学者（民族学）を核としながら、生態人類学・経済人類学・民族考古学・民俗学・統計

※神奈川大学歴史民俗資料学研究科博士課程

学・漁業経済学・生態学・国際漁業管理・獣医学といった専門分野に身を置く研究者たちが、このきわめて現在的な問題に応えようとしているのである。

2．本書の構成と概要

本書は4部から成り、以下のように構成されている。

はじめに

目次

第一部　総論

序論―捕鯨に関する文化人類学的研究について（岸上伸啓）

世界の捕鯨文化―人類とクジラのかかわりを再考する（秋道智爾）

第二部　先住民族による捕鯨

先住民族捕鯨再考（浜口尚）

アメリカ・アラスカにおける先住民生存捕鯨について（岸上伸啓）

カリブ海・ベクウェイ島における先住民生存捕鯨（浜口尚）

インドネシア・ラマレラの伝統捕鯨文化と社会変化（江上幹幸・小島曠太郎）

カムチャツカ半島先住民のシロイルカ猟について（渡部裕）

第三部　日本および韓国における地域捕鯨の歴史と現状

考古学から見た日本列島における捕鯨（山浦清）

日本における捕鯨の歴史的概要―漁法を中心に（中園成生）

日本における北の海の捕鯨（岩崎まさみ・野本正博）

千葉県和田浦の小型捕鯨業の現状と課題―鯨食文化の継承をめぐって（小島孝夫）

食文化継承の不可視性―希少価値化時代の鯨食文化（赤嶺淳）

日本人の鯨食観（丹野大・濱崎俊秀）

変容する鯨類資源の利用実態―日本の鯨肉流通について（遠藤愛子）

韓国の捕鯨文化（李善愛）

第四部　捕鯨をめぐる現代的問題

商業捕鯨モラトリアムの真実（森下丈二）

「法」の裁きを下すメディア時代の自警団？（河島基弘）

捕鯨と動物倫理（石川創）

おわりに

執筆者紹介

索引

第一部は、本書全体を貫く問題意識を整理する、総論的な部分である。序論では、編者の岸上が、世界の商業捕鯨の展開と衰退の歴史を概観しながら、クジラが環境保護のシンボルとなってきた経緯についてまとめている。さらに、これまでの文化人類学が捕鯨や捕鯨文化をどのように扱ってきたのか、レビューしている。ここでは、反捕鯨や環境保護のシンボルとなってきたのは、地球最大の動物、地球上で最大の脳容積をもつ動物、愉快で歌を歌う動物、人間と友好的な動物、絶滅の危機に瀕している動物、といったいくつかの鯨種の特徴をすべて併せもつような架空のクジラ、「スーパーホエール」(super whale) であるとみるアルネ・カランの論も紹介されており、非常に興味深い。

続く論文で、秋道智爾は捕鯨を通して生みだされてきた技術、食文化、社会経済、価値観などを包括的に「捕鯨文化」・「クジラ文化」と呼んでいる。人間とクジラの関わり合い方はそもそも地域的・文化的に多様であり、歴史的にも変容し続けてきた。ここでは、捕鯨の多義性、資源利用の方法に加え、日本の各地でクジラが大漁をもたらす「エビス」とみなされる例や、クジラの胎児が埋葬された寺の例を挙げながら、捕鯨に付されたイメージについても検討している。そのうえで秋道は、この捕鯨の文化的な多様性を無視することこそが、捕鯨推進／反捕鯨といったきわめて二元論的な議論への矮小化につながるのだと指摘している。

第二部と第三部は、いずれも世界の捕鯨文化が実に多様性に満ちていることを教えてくれる

論考となっている。第二部は、主に「先住民生存捕鯨」に焦点が当てられており、国際捕鯨委員会（IWC）において先住民生存捕鯨が規定されていく経緯を追いながら、その定義に関わる問題について取り上げる浜口尚の論文から始まる。浜口はこのなかで、捕鯨／反捕鯨という主張が国際的な舞台においてきわめて政治的に決定されることに疑問を呈し、捕鯨に文化的・栄養的・経済的必要性があり、かつ捕殺対象となる鯨種が絶滅の危機に瀕していない場合には、いかなる形態の捕鯨も容認されるべきとの見解を示している。続いて、浜口の論考を基礎としながら、アラスカ（岸上論文）やカリブ海のベクウェイ島（浜口論文）、インドネシアのラマレラ（江上・小島論文）、カムチャツカ（渡部論文）の各地で行われる先住民族による捕鯨や、それに関わる諸活動について論が展開される。この四論文の特徴は、異なる地域の捕鯨を扱いながらも、最終的には、捕鯨者や村人たちというのは、鯨肉の分配や交換、儀礼での共食といったものを通して自らのアイデンティティを確立することが可能となっており、捕鯨は精神的・社会的・文化的・政治的・栄養学的に重要なものであると結論づける点にあるだろう。

続く第三部は、日本と韓国の事例から、地域捕鯨（IWCが決定に係わる捕鯨には含まれないクジラ漁やイルカ漁）の歴史と現状が、決して一枚岩では捉えられないものであることを論じる部分である。まず、山浦清が考古学の立場から、また中園成生が歴史学の立場から、日本近海での捕鯨の歴史について考察している。二人の論考からは、日本近海における捕鯨はきわめて古い時代にまで溯ることが可能であるが、同じ日本近海であっても、捕鯨の方法には地域的な差異が見られ、同じ地域でも時代を追うごとに方法が変化してきていることがわかる。続く岩崎・野本論文では、北海道という一地域の捕鯨の歴史を、アイヌの人々によるクジラ利用文化の伝統と、捕鯨砲の発明に始まる近代捕鯨の伝統という二つ側面から考察している。小島孝夫は、房総半島の和田浦におけるツチクジラを対象とした小型捕鯨業の歴史と現状について報告する。小島は、日本には商業捕鯨モラトリアム発効後に国策として始められた南極海などでの調査捕鯨と、沿岸域を漁場として今日も継続されている小型捕鯨が併存するにもかかわらず、後者は国内においてもほとんど知られていないことに触れている。これはつまり、商業モラトリアムによってすべての種類の鯨類に対する捕殺が禁止されており、『ザ・コーヴ』に登場する太地町などで行われる小型捕鯨も密猟であるという誤ったイメージが日本でも広がっていることを意味している。小島によれば、その一方では、メディアが日本文化として捕鯨を取り上げる際には、日本各地で小型捕鯨業のような捕鯨が伝統的に行われてきたかに錯覚させるような演出もみられるという。

赤嶺淳は、日本の鯨食文化に焦点を当て、それを伝統的な文化と捉える捕鯨推進派にありがちな見方と、それは近現代に形成されたフィクションであると位置づける反捕鯨派にありがちな見方とをともに退けながら、鯨食文化のあり方を通史的に見つめている。赤嶺の論文は、①江戸期の鯨食文化、②戦後復興期から高度経済成長期における鯨肉の国民化の過程、③商業捕鯨モラトリアム以後に稀少化した鯨肉資源の利用という三つの段階に分けて鯨食文化を捉えており、鯨食の慣行をさまざまな政治・経済的な要因と交差させながら多角的に考察することの必要性を教えてくれる。次の丹野・濱崎は、日本人全体の意見としてしばしば用いられる、捕鯨への意識に関する社会調査のあり方に強く反発を抱いている。従来のものは、捕鯨賛成か反対かだけに着目して調査が行われており、なぜ賛成なのか、なぜ反対なのかという因果的説明が一切ないにも関わらず、説得力をもつデータとして活用されてきた。必要なのは、日本人の「経済社会文化構造の中にある鯨食観」を知ることである。丹野・濱崎が首都圏でアンケート調査を行ったところ、鯨肉料理の普及を促す要

因は「日本沿岸の鯨を水産資源とみなす意識」と「鯨肉料理を日本の伝統的料理とみなす意識」に求められることがわかったという。遠藤愛子は、商業捕鯨モラトリアム発効後の日本における鯨肉生産、流通、消費の変容について具体的な事例を報告し、問題点を挙げている。続く李善愛の論文からは、日本と海を隔てた向こう側の朝鮮半島における捕鯨も、歴史的にみれば多様なあり方を呈してきたことがわかる。さらに、商業捕鯨中止から現在までの韓国の捕鯨文化について、捕鯨の中心地であった蔚山地域を例に挙げた報告では、近年になって村で始められたクジラ祭が、国境を越えて地域の文化資源や観光資源として再構築されてゆく様子も描かれている。人とクジラとの関係は、韓国の社会・文化のなかで、現在も変化し続けているのである。この第三部は、捕鯨推進派が論拠にしがちな「自国に伝統的にあった」捕鯨文化という見方を相対化する試みである。これに対し、最後の第四部では、反捕鯨派の主張のほうを相対化してゆく論考となっている。

第四部では、捕鯨をめぐる賛成派・反対派の対立を高めることにつながっている現代的な問題が検討されている。森下丈二は、一切の捕鯨を永久的に禁止し、捕鯨を倫理的に否定し、クジラが絶滅に瀕しているか、あるいは資源が豊富であっても、特別な存在として保護するべきものと規定しているとイメージされやすい商業捕鯨モラトリアムについて、その性格を明らかにしている。それによれば、そもそもは資源評価を行い、クジラの捕獲枠を検討するという商業捕鯨モラトリアムの実際の規定と、反捕鯨勢力が推進してきた上述のようなイメージが、捕鯨支持国と反捕鯨国の間の激しい対立を生んでいるという。この論文では、商業捕鯨モラトリアムの存在こそが、科学的な根拠のない「すべてのクジラが絶滅の危機に瀕している」というイメージを強化することにもつながっていることにも触れられており、興味深い論となっている。河島基弘は、反捕鯨団体として名高いシー・シェパードの問題を論じる。この論考で河島は、シー・シェパードは、その実行行使と巧みなメディア操作で「抗議ビジネス」を展開する点でグリーンピースと類似性がみられるが、他団体にはみられない自警団に似た性格ももつという。続く石川創の論文では、反捕鯨派によってたびたび取り沙汰される捕鯨に関する倫理、つまり動物福祉の問題について論じている。動物福祉とは、人間が動物を所有・利用することを前提として、動物の苦しみを最低限に抑えることを目的としたものである。反捕鯨派の動物愛護団体の多くは、家畜（畜産動物）と比較しながらクジラの捕殺が動物福祉の基準に合致せず、劣っていると主張する。だが、そもそもクジラは家畜ではなく野生動物である。興味深いのは、ほかにも、「食用動物の福祉」という考えを用いて、反捕鯨を主張する動物愛護団体が存在することである。石川によれば、この考え方は、反捕鯨の最前線にある欧米の国々が辿ってきた鯨油のためのクジラ乱獲という歴史をすべて免罪する力をもっているという。最後に石川は、捕鯨国はIWCのなかで古くから捕鯨に関する動物福祉に取り組んでおり、これまでに一定の合致と成果が得られていることや、クジラに対する動物福祉ばかりを偏った面から主張するのみでは、今後、ほかの野生動物に対する動物福祉との間で矛盾が浮き彫りになるはずであることを指摘し、動物福祉の問題は直接的に捕鯨を否定する要因にはならないという。

3．おわりに

総論の部分で秋道は、そもそもはそもそも地域的・文化的に多様であり、歴史的にも変容し続けてきた人とクジラとのつきあいのあり方を無視することこそが、捕鯨推進／反捕鯨といった二元論的で単純な議論の矮小化につながるのだと指摘している。動物愛護団体や環境団体と、クジラを捕獲し、殺して食べる人々の間に根強い対立を生みだすことになってきたこの単純な二元論を、まずは乗り越えることが必要である。

本書は学際的な観点から議論を重ねることで、世界の捕鯨文化が実に多様性に満ちており、地域社会の人々がアイデンティティを確立するうえでなくてはならぬものである事実を示すことに成功している。これは一見すると、世界において捕鯨が伝統的な文化であり続けてきたことのみを主張する捕鯨推進派が陥りがちな理論にも見える。

しかし、本書は現在の反捕鯨派によるクジラと人の関係性についての主張について、ある時代に特定の文脈において政治的に生みだされた一つの見方に過ぎないとして相対化してゆく一方で、捕鯨推進派が論拠にしがちな「自国に伝統的にあった」捕鯨文化という見方を様々な面から相対化しながら理解してゆく方向性を持っている。この点において、きわめて文化人類学的な研究であるといえよう。本書のすべての執筆者は、自身の調査・研究に基づきながら、クジラを食料資源とみなし、特定のクジラ資源が持続可能であるならば、捕鯨を是とすると主張している。しかし、一方では岸上が明らかにするように、執筆者たちは文化相対主義の立場から、「クジラは食料資源ではない」と主張し、捕鯨に反対する人々の考え方も、決して否定はしないのだという。文化人類学や民俗学を専攻する私たちにとっては、実に親しみやすい文化相対主義の立場である。

だが、反捕鯨派は、この本をどう読むだろうか。この先、捕鯨支持派と反捕鯨派は、分かり合うことができるようになるだろうか。この問題は、まだ先に残されたままである。

参照文献

フェルトカンプ・エルメル　2006　「愛玩犬と食用犬の間」『東アジアからの人類学』伊藤亞人先生退職記念論文集編集委員会　pp.181-193

（A5判　339頁＋ii頁＋VI頁　2012年３月成山堂書店）

会　告

比較民俗研究会のロゴマークの募集

比較民俗研究会では、会の発足20周年、会誌25号発刊、研究会100回開催などを踏まえ、この機に会の趣旨や活動を端的に表すロゴマーク、シンボルマークを作り、会誌や研究会、シンポジウムの折、封筒のデザインとして使うことを考えました。良いデザインがありましたら是非、提案してください。研究会の折などに、寄せられたマークを検討し、合意をみたら決めたいと思います。

◇会名：　（和）比較民俗研究会　　（英文）Comparative Folklore Society
◇誌名：　『比較民俗研究』　　“Comparative Folklore　Studies”
◇応募：・一件につきA4判用紙一枚に図版、説明を記載。色は、複色でも可
（印刷は、単色となる）
・〆切り　2012年度末、月例の研究会ごとに区切ります
・良いマークがない場合、随時の提案に切り替えます
・海外同人の斬新な発想に期待します
・会の活動などは、HPを参考にしてください
http://hikakuminzoku.web.fc2.com/index.html